

熊本地震の被災状況下における研究活動を振り返る

—私が体験した研究継続上の苦悩・課題と研究を止めないための工夫—

○ 西南女学院大学 氏名 梶原 浩介 (008751)

キーワード3つ：熊本地震、被災経験、研究活動

1. 研究テーマについて

私はこれまで不登校・ひきこもり状態にある子どもや家族に対するソーシャルワーク実践に携わってきました。この実践を踏まえて、①「生活課題を抱える子どもや家族が自分で未来を切り開くとはどういうことなのか?」、②「子ども・家族と共に歩むソーシャルワーカーは何をすべきなのか?」という問いが生じました。かれらとの関わりのなかで、生活課題に向き合う上での家族の悩みや家族なりの乗り越え方を見出す取り組みを、ソーシャルワーカーとして側で見守ってきました。

この実践を踏まえて、研究テーマ「不登校事例を通して見た家族支援におけるファミリーソーシャルワークの展望」について研究活動に取り組みました。本研究の目的は、子ども・家族の語りからみえる①生活課題に対する取り組み、見出した知恵や技術・価値、②生活課題を乗り越えるまでのプロセスについて明らかにすることを目指しました。方法は、個別面接調査等を実施し、質的分析によって、家族1人ひとりの生活課題を乗り越えるまでのプロセスの段階、支援者間のコンサルテーションの在り方、子どもの学校に行く意味・休む意味という価値について明らかにしました。

2. 直面した危機・困難と研究遂行における苦労・苦悩

私は、2016(平成28)年4月14日(前震)と16日(本震)の熊本地震の被災によって、当時直面した危機・困難としては自然災害(地震)による研究環境への影響でした。当時を振り返り、あくまで私の個人的な経験に基づいたものになりますが研究遂行における苦労・苦悩として以下に3点整理します。

【研究継続上の苦悩・課題①：日常生活に関する危機的状況】

- ・ 研究する以前に“生きる”ための営みが自然災害によって日常生活を奪われる。
例：避難生活や水・食糧の確保できない。

【研究継続上の苦悩・課題②：就労に関する危機的状況】

- ・ 生活を維持するためのお金を稼げない。(学生として、学費の支払いの負担など)

【研究継続上の苦悩・課題③：研究活動に関する危機的状況】

- ・ ①②の生活基盤が崩れたために、生きること、家族を守ることが私の最優先事項。

- ・ 自然災害によって、社会活動がストップし、大学院での教育活動が受けられない。
(例：指導教授からの指導が得られない、研究室も使えないなど。)

3. 研究遂行における工夫や課題

2の被災経験をもとに、その当時直面した危機・困難の最中に、研究遂行する上で工夫したことを以下に3点整理します。

【研究を止めないように工夫したこと①：日常生活に関する危機的状況】

- ・ 研究するための生活環境（衣・食・住）の整備

【研究を止めないように工夫したこと②：就労に関する危機的状況】

- ・ 大学院側による救済措置 ⇒ 学費の支払い時期の延期や減免措置を実施。
- ・ 現場との関わり ⇒ 電話・メールによる相談、調整などの業務が中心。

【研究を止めないように工夫したこと③：研究活動に関する危機的状況】

- ・ 私自身は、博士課程3年目の時期に被災。
⇒ 研究計画に沿った日頃の研究活動の積み重ねが功を奏した。

4. 学会への要望など

① 被災経験を通してみえてきたこと

私は熊本地震の被災経験を通して、「前提に、研究活動の基盤に“生活＝生きる営み”があること」「予期せぬ事態に備え、見通しをもった研究計画を立てること」「自分は、“誰のために”“何のために”研究をしているのか、常に意識をすること」「いまの生活環境や人とのかかわりは、当たり前ではない」について研究活動を続けてきた中でみえてきました。

② 学会への要望

私は熊本地震の被災経験を踏まえて、「ZOOMなどのICTを活用した学会活動の継続支援」などについて、引き続き、ご支援いただけたらと思います。